



**障害のある高学年の子どもたちの  
つとえ あそぶ つながる  
ハンドブック**



平成 18 年度 独立行政法人福祉医療機構(子育て支援基金)助成事業  
『高学年障害児童の家族支援とインクルージョン推進事業』報告書  
社会福祉法人西陣会 西陣児童館



イラスト：田中さやか

# もくじ

## ①はじめに 4

## ②つどう

つどいのはじまり 6

つどいのかたち 8

みんなつどえば(データ編) 10

## ③あそぶ

1日あそぶ!? 12

お楽しみはイベントだ!! 15

あそびを通して考える 17

## ④つながる

保護者とつながる 18

地域住民や関係機関とつながる 20

## ⑤まとめ

～「つどい、あそび、つながる」場づくりから見えてきたこと～

保護者からの視点 24

中高生(同世代の仲間)からの視点 26

ボランティア(実習生)からの視点 28

専門職からの視点 31

## ⑥資料集紹介 36

## ⑦その他

新聞掲載記事 38

ご協力になった皆さま 40

# ①はじめに

## 居場所がない！

学齢期の障害のある子ども達の居場所について思い巡らすと、まずは家庭、そして学校……。そして、次に思い浮かぶ居場所のひとつとして、児童館(学童クラブ)が挙げられるのではないのでしょうか？

障害のある子ども達を取り巻く環境を振り返ってみると、全国的には2003年度から支援費制度の開始によって、家族以外との外出機会が増えるなど、介護者の確保という観点からは大きく前進しました。一方で、京都市においては1990年より児童館事業における学童クラブ事業において障害のある子どもの受入が開始されており、現在は小学校4年生までの障害のある子どもが学童クラブで放課後や土曜日、長期休暇中を過ごしており、全国的に見ても先進的な取り組みが行われています。

しかし、支援費制度によりはじまった介護者の確保は、基本的にマンツーマンでのかわりであるということや、限られた時間しか利用できません。また、学童クラブ事業における取り組みは放課後や土曜日、長期休暇中に対応できており、同世代の子ども同士の交流が図れるというメリットがある反面、登録に際して保護者の就労が前提となっていること、小学校4年生までは利用することができても、5年生以降の学童クラブにかわる居場所がないという不安を抱えてしまう状況です。

京都市児童館活動指針(注1)によると、児童館の基本活動のなかに「障害のある子どもの居場所づくりと活動への参加促進」という項目が掲げられています。しかし、実際には学童クラブ登録外の障害のある子ども達(特に小学校5年生以降の子ども達)へのかかわりという部分においては困難な部分があるのではないのでしょうか。

保護者の方々から次のような話を聞いたことがあります。「4年生までは学童クラブにいれても、5年生以降はどうしたらよいのだろうか？仕事をやめないといけない……」「普段の日はなんとか過ごせても、夏休みは地獄だ……」

このような保護者からの声は、“学校以外の日中活動の場がない”という一言に集約されるのではないのでしょうか。以前に比べ、学齢期の障害のある子

どもへの制度施策は充実してきたものの、まだまだ不十分であることには違いない現状があります。

(注1)「京都市児童館活動指針(改訂版)」

2005年3月発行 編集・発行京都市保健福祉局子育て支援部児童家庭課

## やってみました！

西陣児童館ではそのような背景のなか、2006年度独立行政法人福祉医療機構(子育て支援基金)の助成を得て、『高学年障害児童の家族支援とインクルージョン推進事業』を実施しました。

この事業は地域にある既存の小規模児童館の機能を最大限に活用すべく、小学校5年生以降(中高生含む)の障害のある子ども達の土曜日や長期休暇中の居場所づくりを中心に、障害のあるなしを越えた仲間同士のかかわりや共に成長していくことができる環境の整備、障害のある子どもを抱える家族への支援にも寄与することを目的に実施してきました。

初めて出会う子ども達や保護者の方々、初めての実践、初めて聞こえてきた声・・・初めてづくしの1年間ではありましたが、子ども達の笑顔、保護者の方々からの応援、多くの方々に支えられ、実施することができました。

## ハンドブックについて

このハンドブックは、地域のなかで障害のある子ども達が健やかに育ち、より豊かに暮らしていくための児童館での実践例のひとつとして、これまで実施した事業内容を「つどう」「あそぶ」「つながる」という3つのキーワードを切り口として紹介させていただきます。

このハンドブックが、地域での実践のご参考や、新たな実践への契機となることを願っています。また、私たちが行ってきた実践が優れているとは思っていません。「こういうこともできるのではないか?」「こう考えた」など、具体的な実践や試みやご提案、ご意見を讀まれた皆さまからいただけると幸いです。

# ② つどう

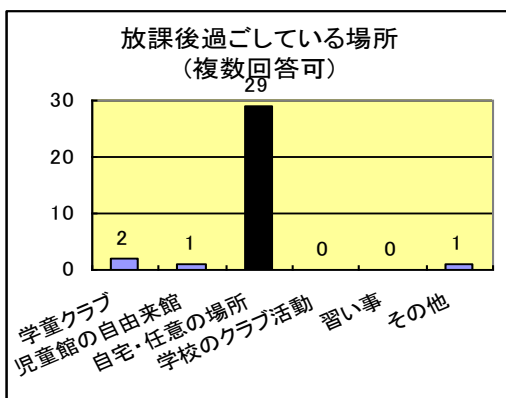
## つどいはじめ

障害のある子ども達の居場所づくりを始めるといっても、まずは子ども達をとりまく状況はどうなっているのだろうか？そもそもニーズがあるのだろうか？ニーズといってもどの部分に特にニーズがあるのだろうか？それらを把握、整理するために実態調査のアンケートを実施しました。

京都市立北総合養護学校小学部保護者(全57名)の方々にご協力いただき、約6割の回答を得ました。

### 学校以外の居場所はほとんど自宅！

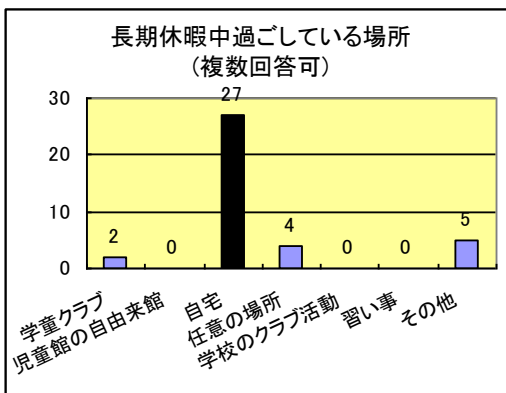
障害のある子ども達は放課後や長期休暇中を一体どこで誰と過ごしているのでしょうか？下記グラフから実態が見えてきます。



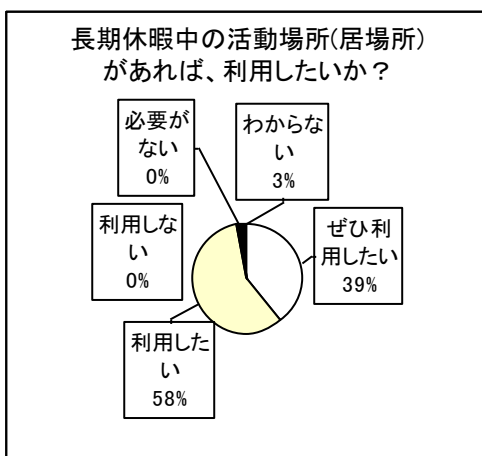
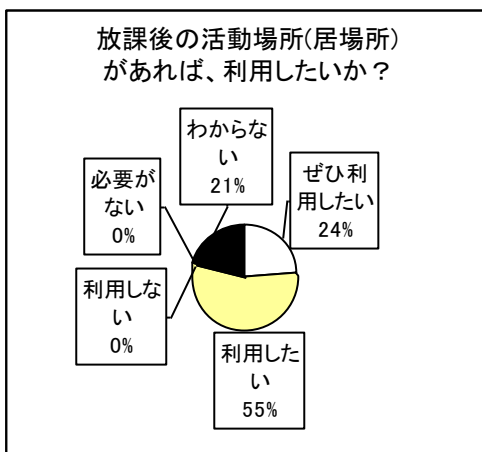
放課後も、長期休暇中も子ども達の過ごしている場所のほとんどが自宅を占めているということがわかります。

また、誰と一緒に過ごしているかの回答にも、上記の自宅で過ごしているという回答がほとんどを占めているように、家族親戚と過ごしているというのがほとんどでした。次いで多かったのがヘルパーを利用しているとのことでしたが、その回答も1割にも満たないものでした。

なかには、ボランティアと一緒に過ごしているとの回答も1例ありました。



## 放課後 V S 長期休暇中のニーズは、長期休暇中の勝ち！



左図からわかるように、放課後は79%の方が利用したいと回答がある一方で、長期休暇中は97%の方が利用したいと回答がありました。

放課後、長期休暇中ともに利用したいと回答された多くの人が、「他の児童やさまざまな人とのかわりを持たせてあげたい」といった子ども自身の経験や体験の幅を広げてあげたいという理由を挙げられていました。次いで挙げられる理由としては「(フルタイムで)働きたい！安心して働けるから」といった保護者の就労に関することでした。

長期休暇中に利用したいと回答された人の特徴としては、「親も子どもしんどい、限界がある、大変・・・」

といった言葉に表されている通り、保護者の介護疲れが理由として多く挙げられていました。

回答を「わからない」とされている人のほとんどは、子どもの体力面の心配をされているという理由を挙げられています。

## 実態調査からみえてきたこと

障害のある子ども達の自宅学校以外の居場所がない！そして、特に長期休暇中の居場所が求められている！ということが、わかってきました。なかで

も、少数意見ではありましたが、「医療的ケアが必要な子どもも預けられる場所が増えてほしい」「学童クラブを6年生までやってほしい」「重度肢体不自由児も受け入れ可能なところを希望」といった決して見逃してはいけない切実なご意見ご要望をいただきました。

## つどいのかたち

実態調査では、利用したい時間帯や頻度、有料であるならばどのくらいの利用料であれば利用したいか等も質問させていただきました。上記に紹介させていただいた結果も含め、長期休暇中と土曜日の居場所づくりをはじめました。

### 長期休暇はバケーション！土曜日はフィーバー！？

まず、開催日程をどうするのか？ということで、夏休み期間中、冬休み期間中、そして毎週土曜日(9月から)開催することにしました。

夏休み期間中はサマーバケーションクラブ(以下SVC)、冬休み期間中はウィンターバケーションクラブ(以下WVC)、毎週土曜日はサタデーフィーバークラブ(以下SFC)と命名しました。学童クラブのようなあたたかい家庭的な雰囲気や学校のクラブ活動のような好きなことを熱中できるような集まりにしたいという思いから「クラブ」と語尾につけています。(以下、SVC、WVC、SFCを総称してクラブ事業と呼びます。)

そして、クラブ事業を開催するにあたって、下記の3つをクラブ事業の柱として掲げました。

- ・ 長期休暇中、土曜日の高学年(小学校5年生～高校3年生)児童の居場所づくりの試行
- ・ ボランティアの協力も得ながらインクルーシブ(障害のあるなしにかかわらず、さまざまな子どもを包含する)な場づくりをする(同世代児童の多面的な交流)
- ・ 保護者の就労支援の第一歩となることを目指す



## クラブ事業のかたち

開催日程の他に、誰を対象者とするのか？開催時間は？利用料の設定は？・・・など、いざ開催するとなってもさまざまなことを決めなければなりませんでした。試行錯誤の結果、次のようなかたちでクラブ事業を開催することとなりました。

## 対象者と登録料

対象者については、京都市北総合養護学校区内(上京区・北区・中京区・左京区)にお住まいの小学校5年生以上の障害のある子どもとしました。これは、養護学校だけではなく、育成学級や普通学級を問わないものです。

また、子ども達ひとりひとりの状況を把握し、安全に楽しく過ごしていただくために登録制とし、登録人数は概ね20名としました。

さらに、登録制での実施ということで、(実際には選考することなく希望者全員に登録していただきますが)登録希望者多数の場合は下記選考基準を明示し、それに沿って受け付けさせていただくことにしました。

### 選考基準

- ①保護者の方の就労状況
- ②世帯の状況(出産、育児、介護等)

※医療的ケアを要するお子さんについては、個別にご相談ください。

また、登録料については、SVC・SFCは2,000円、WVCは1,000円と設定しました。

## 利用定員

開催場所のキャパシティーや対応スタッフの人員配置から考慮し、1日あたりの定員を10名程度としました。

## 実施場所

対象者が高学年であること、また障害特性等により来館児童と場所を同じくすることはリスクもあるため、児童館に併設する場所で実施しました。

## 利用時間と利用料

下記表の通り設定しました。

利用メニュー	時間	料金
AM利用	9:00～13:00	1,000円
PM利用	14:00～18:00	1,500円
終日利用	9:00～18:00	2,500円
送迎(片道)	8:00～9:00の間 13:00～14:00の間 18:00～19:00の間	500円(片道)
お菓子	15:00位に提供	50円

登録された方が上記のメニューを選んでいただき、その日その日のご都合にあわせて申し込みをしていただくという方法をとりました。

AMの利用時間が9:00～13:00ということで、お弁当を持参していただき、スタッフと一緒に昼食をとる時間を設けました。

送迎については、利用する子ども達の居住区が西陣児童館のある上京区だけではなく他の区にもおよぶということ、障害のある子どもが一人で通うことが難しい場合もあるということを想定し、希望される方には北総合養護学校のスクールバスが運行しているエリア内で送迎を実施しました。お菓子についても希望者に提供させていただきました。

## みんなつどえば（データ編）

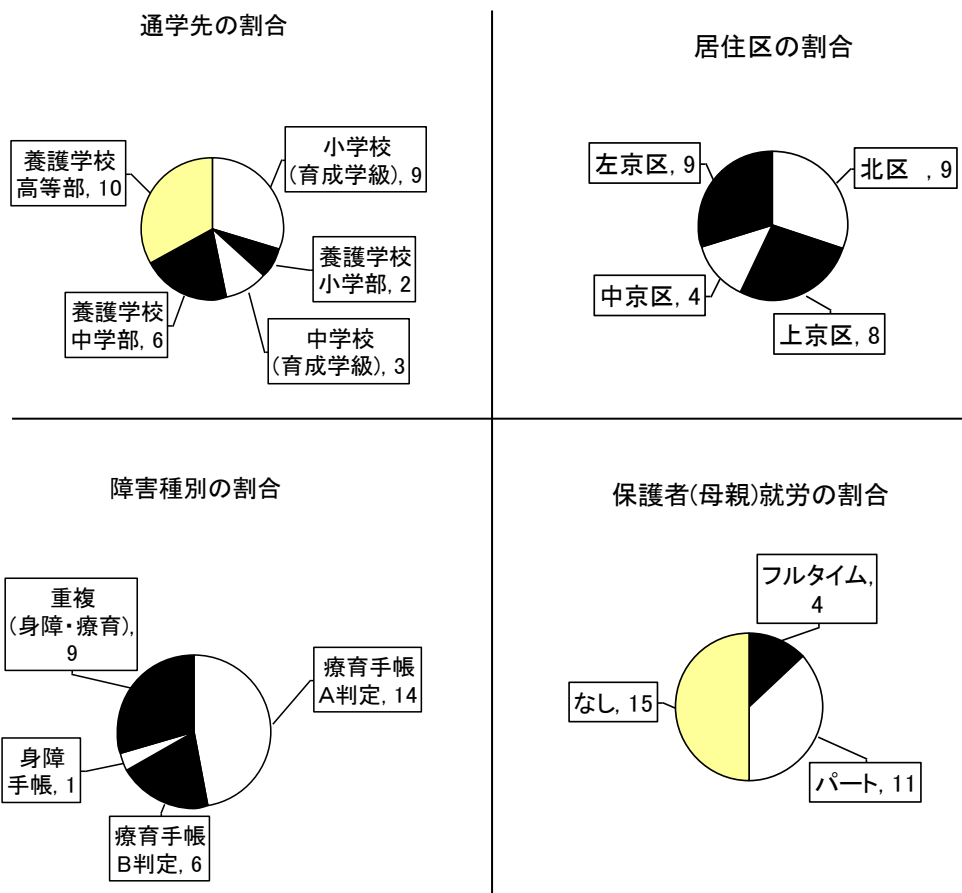
上記のようなかたちで、クラブ事業を夏、冬、土曜日と実施してきたわけですが、登録人数や登録者について、利用実績や利用傾向など・・・データからみたクラブ事業のご報告をさせていただきます。(2007年2月末現在)

### 登録人数はのべ67人

SVC、SFC、WVCと重なって登録された方も多くおられましたが、のべ67人がクラブ事業に登録されたこととなります。(重複分を除くと、30人の子ども達と出会えたこととなります。)

## 登録者の割合は？

対象者を小学校5年生から高校3年生までとし、障害種別を問わず登録していただいていたわけですが、蓋を開けてみれば下記のような割合でご登録していただいたことになります。



## 利用人数はのべ432人

SVC、SFC(2月末現在)、WVCの開催日数を合計すると56日間あるなかで、のべ432人の利用がありました。また、クラブ事業に毎回定員10名の利用があったときを100%として利用率を算出すると、SVCは42%、SFCは58%、WVCは83%でした。

# ③あそぶ

これまでは、“つどう”というキーワードで障害のある子ども達がつどう場づくりの過程や枠組み、利用状況等を見てきました。本章では“あそび”というキーワードを軸に、子ども達の1日の過ごし方や、仲間と楽しく一緒に経験を積むことを目的としたイベントやそこで工夫したことなどの“つどう”の中身について紹介します。

## 1日あそぶ！？

### 【とある午前の過ごし方】

#### AM 9:00【来館】

送迎車の迎えで来る子ども、ご家族と一緒に来る子ども、一人で来る子どももいます！！朝の会では元気に挨拶できました。



「スタッフと一緒に自己紹介！」

#### PM 12:00【お昼ごはん】

今から‘お昼ごはん’という切り替えのため「いただきます」の歌を歌って、待ちに待ったお弁当の時間です♪



「みんな一緒にわいわい昼食」



#### AM 9:00~12:00

外に出たら落ち着く子や走り回るのが好きな子どものため、天気が良ければ近くの公園まで散歩へ行きました。室内ではトランプをしたり、友達同士お話をしたり思い思いに過ごしています。



「近くの公園のすべり台にて」

#### PM 13:00

午前利用はここでおしまい。食後なので、のんびりする終日利用の子どもがいる一方で、手持ち無沙汰な子どもは近くへ散歩に行ったり、落ち着いてできる作業的なメニューに取り組んでもらいました。



## 【とある午後の過ごし方】



### PM 15:00 【おやつ】

みんなの大好きな時間です。  
好き嫌いや身体的な制限もありましたが、2種類用意し皆が一緒のメニューを食べれるように工夫をしました。

もちろん、♪おやつの歌♪を歌って  
いただきま〜す♪



「ホットケーキをつくった日も」

### PM 14:00~15:00

午後利用の子ども達も来館して  
にぎやかになります。  
お昼の会がおわったら、早速おもちゃをひっぱりだして遊んだり、「みんなで聞こう！」と持ってきてくれたCDを聞くことも♪



### PM 16:00~17:00

ときにはそれぞれ好きなことをして  
遊んだり、みんなと一緒に遊んだり、  
テンションもあがっちゃいます！



「夏は水遊びも！」

### PM 17:00~18:00

日中沢山遊んでテンションがあがり  
っぱなしで自宅に帰るのではなく、  
クールダウンをしてから帰ることも  
大切です。



「ビデオ鑑賞でクールダウン」

### PM 18:00

ご家族と帰る子どもや、送迎車で  
帰る子ども、「今から帰る」と電話  
をして帰る子どももいました。  
子どもによっては、誰が迎えに  
来て、家ではなにをするという予定  
を事前に伝える工夫もしました。



これまで「とある1日の過ごし方」を見てきました。最も長い子どもで朝の送迎から帰りの送迎まで含めて11時間もの時間過ごすこととなりますが、メリハリをつけた遊び方が特に大切になってきます。

次は、一人ひとりに合わせた個別の取り組みや、一人ひとりが別々に遊ぶだけではなく集団にひろがりつなげていく工夫を紹介します。

### カームダウンエリア（落ち着ける場所）の設置

視覚的な刺激や音などの刺激が苦手で、元気いっぱいの子どもたちの輪の中で過ごすことが辛い子どももいました。場所やスタッフの制約もあるなかで、ただ単に別室を用意するというのではなく、部屋の一角をダンボールで簡単な囲いを作り、落ち着いて過ごしてもらうことを目的とした「部屋」を作りました。

別室であれば、他の子ども達との接点をなくしてしまうこととなりますが、カームダウンエリアでは、その子どもを完全に孤立させてしまうのではなく、少し覗けば他の子どもたちの様子が分かるように工夫もしました。

### あそび道具を通した関わり

なかなか集団であそぶ、という事が苦手なみんな。初めの頃は、どうしても一人で遊んだり、スタッフとマンツーマンで過したりする時間が多い子ども達が多くいました。

“子ども同士でもっとあそんで欲しい”

“集団だからこそできることをしたい”

と考えた時にトランプやオセロ、風船、大きな布・・・等のあそび道具を使って誘うと、みんなが自然と集団であそべる時間が増えてきました。

一度そのようなあそびをやってみると、その後子どもの方からやりたいと声をかけてくれる事も多くなり、みんな仲良く関われる大きな一歩になりました。子どもが仲良く成長するための“きっかけ”をつくる事の大切さを感じる取り組みとなりました。



「風船あそびの風景」

## お楽しみはイベントだ！！

これまでは、ただ単に時間を過ごすだけではなく、その時間をいかに楽しく、そして子ども達の体験やつながりをひろげていくかという工夫等を紹介してきました。

次は、ある程度定められた時間枠や場所にとらわれず実施してきたイベントを紹介します。

### おいしさもわけわけ、もちつき大会

児童館企画として餅つき大会を開催しました。参加者は、クラブに来ている子ども達だけではなく、学童クラブの子ども達や、幼児クラブの子ども達、そしてその親御さんまで幅広く地域の子供達や大人達が集まって、みんなで一斉に「よいしょー！」と声を出してお餅をつきました。

一緒についたおもちを皆で食べるという、児童館全体の良い交流の機会となりました。



### レッツ！クッキング！

自分たちの力でお昼ご飯づくり！

買出しから後片付けまで、それぞれが役割をもって、カレーライスづくりに挑戦しました。ペーパーナイフを使い上手に野菜を切る子どもやカレーのルーを溶かす子どもなど、何を誰と一緒にやろうか企画段階から考え、そして当日一人ひとりにやりたいことを確認してから実施しました。

「おいしー！！」その一言と、満足した表情がとっても良かったです。

家でのお手伝いにもつながったりするかも！？



## 芋掘りにレッツゴー！



車に乗って、京都府の城陽まで芋掘りに行ってきました！

掘ったお芋を「見てー！」と自慢気に見せてくれる子どもや、ミミズを捕まえて走り回っている子どもなど……。普段の室内にいる時とは、また違った表情を見せてくれるみんなでした。

掘ったお芋は、もちろんおいしく焼き芋にいただきました！

## 年に一度の子どもフェスティバル♪

西陣児童館では毎年恒例の子どもフェスティバル。「赤ちゃんから中高生まで！障害のある子もいない子もみんな楽しめる！」をコンセプトにボランティア達と企画段階から一緒に考えて実施しました。

びりびりコーナー、かきかきコーナー、ぐるぐるコーナー、お菓子の屋台、風船で埋め尽くされている部屋やまったりできるスヌーズレンの部屋まで、児童館の1階から3階までを使って全10種類を超えるコーナーで、それぞれがおもいきり自分の好きなことを楽しみました。



「一番人気のびりびりコーナー」



「みんなで風船&パラバルーン」

## ほかにもいっぱい

夏休中は週1回アクアリーナのプールまで出かけたり、鴨川や御所への散歩、粘土や絵画などの造形活動や音楽活動の日をイベントとして設けたりしました。



また、遊園地に出かけたり、季節ごとの行事(運動会やクリスマス会)を開催したりしました。

## あそびを通して考える

これまで、日常的なあそびから非日常的なあそびまで、これまで実施してきたことを紹介してきました。ここでは「あそぶ」の章のまとめにかえて、私達が日々“あそぶ”上で大切にしていることを紹介します。

### 一人ひとりの顔を思い浮かべて

同じあそびでも、好き嫌いやあそび方、楽しみ方は一人ひとり違うものです。まずは、あそぶ前に「この子ならこんな反応があるんじゃないか?」「あの子ならあんなあそび方をするんじゃないか?」など、一人ひとりの顔を思い浮かべてイメージすることを大切にしています。

### なんのためにあそぶの?

なんのためにイメージするのか?それは、ただあそんで楽しいだけで終わらせてしまうのはもったいない。あそびを通して一人ひとりに体験してもらいたいことや「こうなってほしい」といった“ねらい”をもつことにつながるからです。

この“ねらい”を持つということが、子ども達一人ひとりの成長につながっていくと信じています。

### やっぱり楽しい

あそんで楽しいだけではもったいないですが、楽しくなければあそびではないし、何もはじまりません。子ども達が楽しいだけではなく、スタッフもそしてそこにかかわっているボランティア達も、一緒に楽しみ、そして「楽しかった」と思える瞬間を積み重ねていくことを大切にしています。

## ④ つながる

児童館の活動領域を大きく分けると、次の3つに分けられます(京都市児童館活動指針(改訂版)より)。ひとつが『子ども育成活動』、もうひとつが『子育て家庭支援活動』、さいごに『地域福祉促進活動』が挙げられます。

先ほど見てきた“あそぶ”の章では、主に『子ども育成活動』のなかの基本活動である「障害のある児童の居場所づくりと活動への参加促進」であり、部分的に『地域福祉促進活動』の基本活動である「地域住民との交流を促進する活動」や「ボランティア活動の促進」の場となってきました。

本章では、“つながる”をキーワードとして、クラブ事業の“あそび”を通して生まれた子ども同士のつながりだけではない、主に『子育て家庭支援活動』としての保護者とのつながりや、『地域福祉促進活動』の最たるものとしての地域住民の方々、さらには関係機関とのつながりについて紹介します。

### 保護者をつながる

子ども達の健やかな育ちや、より豊かに地域で暮らしていくことを考えるとき、児童館の中だけで子ども達の姿を見ているだけでは叶いません。子ども達は大きく分けると次の3つの領域で生活しているからです。まず子ども本人の家庭、そして学校、さいごに家庭でも学校でもない第三の子ども達の居場所として児童館があると私達は考えています。

ここではまず、子ども達の最大の居場所である「家庭＝保護者」とのつながりを紹介します。

### 必要な情報はどこにあるのか？

障害のある子ども達を抱える家庭にとって、子ども達本人が使える社会資源とどう上手くつながっていくかということも大きな課題のひとつです。しかし、支援費制度から障害者自立支援法へとめまぐるしく制度が変わっていくなかで、特に障害のある子ども達を抱える保護者に制度理解が浸透していない現状があります。そのような背景から、約30名の障害のある子どもを

抱える保護者と障害者自立支援法の制度理解の勉強会を開催しました。

講師に京都市北部障害者地域生活支援センター「きらリンク」の相談員である土屋健弘さんをお招きし、制度を学ぶと同時に障害のある人ご本人やその家族の相談窓口があるということを知っていただき、また支援センターを通して地域の社会資源とのつながりが生まれることを期待して実施しました。

勉強会では、クラブ事業の紹介もさせていただき、ご出席いただいた方からクラブ事業にご登録された方も多数おられました。

## 大切なことは皆おなじ

障害のある子どもを抱える保護者だけではなく、障害のない子どもを抱える保護者にとっても、障害のあるなしにかかわらず同じく直面する悩みはあるのではないのでしょうか。昨今、子ども達にまつわる痛ましい事件や考えさせられる出来事が起こっているのを受けて、ある保護者から「何かしたい、何かを感じ、考える場を皆で共有したい」という提案があり、次のような子育て支援講座が実現しました。

「命の重さをひとしく支えてこそ」というテーマで、青少年自立援助ホームセルフサポートセンター東樹のホーム長である龍尾和幸さんをお迎えし、実体験を交えたお話をいただきました。約25名の学齢期の子どもを持つ地域の保護者に参加していただき、参加者の方からも子育てへの不安・悩みをお聞かせいただくこともできました。短時間ではありましたが、参加者の方々が一緒に想いを共有するなかで、保護者同士のつながりが生まれた場面ともなった講座でした。

## 保護者とつながる

私達が保護者と出会う場面は、送り迎えのときがほとんどです。そして、子どもについてのやりとりは連絡帳を活用することが多く、ゆっくりお話ができる機会が多いとはいえません。このような勉強会や講座を機会に日常お話できないことを話したり、よりお話ししやすい関係が築いていけることを願っています。

また、紹介した勉強会や講座は、私達と保護者のつながり以上に特に保護者同士のつながりを築ける機会として活用できたらと考えています。

## 地域住民や関係機関とつながる

地域のなかにある児童館ということ考えたときに、児童館の対象者は子どもであることはもちろんですが、その子ども達を取り巻く地域の人たちともつながりを持っていくことが大切になります。そしてまた、地域を越えた専門機関や支援機関などの諸関係機関とつながっていくことも、子ども達の健やかな育ちや地域生活を考えたときに必要となります。

ここでは、そのような地域住民の方々や関係機関などとのつながりについて紹介します。

### クラブ事業検討委員会の開催

現在行っていることや、特に新しく事業をはじめるにあたっては、内々だけで事業をつくっていくのではなく、さまざまな視点から確認していくことが求められます。

サマーバケーションクラブなどの障害のある子ども達がつどえるクラブ事業をはじめるにあたって、「クラブ事業検討委員会」を立ち上げました。本委員会では、障害のある子どもを持つ保護者や京都市在住の障害のある人(子ども)達の相談窓口である京都市障害者地域生活支援センター連絡協議会の事務局、京都市児童館学童連盟、区の社会福祉協議会、養護学校の方々や元児童館長の方にお集まりいただき、それぞれの視点をもってご意見やご検討をいただける委員構成としました。

委員会の内容については、“つどう”の章で紹介した実態調査のアンケート結果を元にクラブ事業の目的や実際の実施内容について意見交換を行ったり、サマーバケーションクラブ(SVC)終了後には、SVCをご利用いただいた全員を対象とした事業評価のアンケート結果を元に制度整備の必要性や事業

継続について検討を行いました。そして、本委員会でさまざまに話し合った結果のひとつとして、「高学年障害児童の日中活動の場の確保についての要望書」を京都市の保健福祉局保健福祉部障害保健福祉課、子育て支援部児童家庭課、教育委員会指導部総合育成支援課に提出しました。

本委員会を通して、クラブ事業がよりよいものになっただけでなく、障害のある子ども達にかかわる方々や諸関係機関が場を同じくすることで、それぞれのなかで顔の見える新しい関係が生まれたことも成果のひとつであったのではないかと考えています。

## 同世代の仲間、中高生

障害のある高学年(小学校5年生～高校3年生)の子ども達がつどえるクラブ事業を児童館にて実施することを考えたときに、まずはじめに浮かんできたことは児童館が0歳から18歳までの子どもを対象としているということです。これはつまり、高学年の障害のある子ども達と同じ世代の障害のない中高生達も一緒に障害のあるなしを越えて共に有意義にあそび、過ごすことのできる児童館像を私達は想像しました。

しかし、西陣児童館では学童クラブOBを対象とした集まりを不定期に企画しているものの、日常的には中高生の来館人数は少ないという課題がありました。

そこで、クラブ事業に参加している子ども達も一緒に楽しめる非日常的なイベントを立案し実施するという企画を、学童クラブのOBやその友人などに直接呼びかけてみました。結果、10名を超える中高生が集まり、彼らには障害のある同世代の仲間が児童館に来ているということを伝えました。そして、自分達だけではなくその仲間も一緒に楽しめる企画を考えてほしいと投げかけ、夏にはバーベキュー大会、冬にはお菓子づくり&ゲーム大会を企画段階から実施当日に至るまで行いました。

この中高生の企画立案による行事の実施を通して、中高生自身が他者への配慮を考える機会となるとともに、自己実現の場を創出することによって、主体的かつ継続的に児童館や障害のある同世代の仲間達ともかかわりを持って

るようになる第一歩となるように願いを込めました。

## **ボランティア養成講座の開催**

西陣児童館ではボランティア育成活動として、スタッフ全員がボランティアコーディネーター的な役割を担い、ボランティアの募集、オリエンテーションの実施、活動の調整、活動後の振り返りなどを行っています。これは、ボランティア自身の成長とともに地域に住む誰もが尊厳を損なわれることなく幸せに暮らしていくためのよき理解ある地域の人(市民)が一人でも増えていくことを願っているからです。

そのようななかで、中高生と大学生を対象としたボランティア養成講座を開催しました。

### **○中高生ボランティア養成講座**

中高生ボランティア養成講座では、中高生の受入も積極的に行っている社会福祉法人京都保育センター・たかつかさ児童館の児童厚生員である三浦正人さんに講師としてお越しいただきました。三浦さんの体験談を踏まえたボランティアのお話や、レクリエーションを交えながら、参加者9名という少人数ではありましたが、少人数ならではの、ボランティアだけにとどまらない魅力的な講座となりました。

本講座を受けたある高校生は、先にも紹介しました「中高生の企画立案による行事」にも参加し、「やっぱり自分自身も一緒に楽しむことが大切」と三浦さんが言われた言葉が心に残っていたとのことでした。

地域に住む中高生にとって、児童館はあそびの場だけではなく、中高生自身が気づきや成長する機会をもっと提供できる可能性があるかと改めて気づかされた講座でもありました。

### **○西陣児童館ボランティア養成講座**

西陣児童館にボランティアに来る大学生は、児童館の対象者が“子ども”であるのと対照に、“大人”として活動しています。

本講座では、西陣児童館で長年の活動経験をお持ちで、現在当館に併設している知的障害のある人達が利用されているデイセンターふらっとの副所長である宮崎一弥さんに講師としてお越しいただきました。

20人を超える参加者が集まり、前半は、宮崎さんの児童館や障害のある子ども達とのかかわりについてお話いただき、後半には「ここで一言！」というグループワークを行いました。さまざまな場面設定のなかで、障害のある子どもA君やそこに居合わせた地域の人、またA君の障害のないお友達、A君の保護者、ボランティア、通りすがりの人などが登場人物として現れ、A君を中心に引き起こされた出来事に対して、A君も含めた登場人物が発した一言を考えるとというものでした。

障害のある子ども本人の気持ちだけではなく、障害のある子どももない子どもも社会のなかで生活していることに想いを巡らせ、ひとりの“大人”として、またボランティアとして社会からその場面場面がどのように映っているのか、そのとき何をすればよいのかということを考える有意義な機会となりました。

障害のあるなしを越えた子ども達の多面的な交流が生まれる児童館を考えたときに、豊かな発想で広い視野をもったボランティアの存在が欠かせないことも事実です。そして、これから社会に出て親にもなっていく大学生達にそのような視座で物事を捉えられる“大人”になってもらいたいといつも願っています。

# ⑤まとめ

～「つどい、あそび、つながる」場づくりから見えてきたこと～

これまで、地域のなかで障害のある子ども達が健やかに育ち、より豊かに暮らしていくため実践例を、「つどい」「あそぶ」「つながる」というキーワードを切り口に振り返ってきました。

皆さまご承知の通り、活動を振り返るときには必ず次のことを注意しなければなりません。それは、自分本位の視点になっていないかということ、偏った見方をしていないかということです。そのことを踏まえ、本章ではまとめにかえて、この1年間さまざまな角度からかかわっていただいた保護者、中高生(同世代の仲間)、ボランティア(実習生)、専門職の方々から寄せていただいたご意見、ご感想等を紹介させていただくことで、「つどい、あそび、つながる」場づくりから見えてきたことを紹介します。

## 保護者からの視点

保護者の方々からは、アンケートや子ども達の送り迎えのときにさまざまなご意見、ご感想、ご要望、そして時には“しんどさ”であったり、“うれしいこと”を聞かせていただきました。

ここでは、保護者からの視点ということで、ある子どもの保護者の方が連絡帳に書いてくださった生の肉筆を掲載させていただきます。

※ 掲載文中に個人名であったり個人を特定する内容が書かれている部分は、黒塗りにしております。

### A君の連絡帳より

アという間はSVL最終日になりました。  
身体がもうどう過すかわからないかと、何の予定も存在しない不安な  
日を送っていたところは「SVL」事業をやった頃のことを聞いた  
時は、本当に大変な日々でした。

(次頁につづく)



最終日は慣れるかな？ 慣れた頃にはもう夏休みは終わるかな？  
と思っていたのに。 色々な心算をしておきに。 始まりました。  
少々のキャンセルはあったものの、あじは本来の自命をこなして  
(スマイル!! だしおかしな笑) マンチャの面や、好きなのは  
遊びをみつけて遊ぶこと。 お友達との関わり、スタッフの  
方とのやりとりなど、ストレートに自命をこらう場所では  
あったように感じています。

こゝには毎日、XXXXXXXXXX 行こうと楽しみにしている XXXXXXXXXX 場所は、  
冷まるとTFだったくらい。 SVCは XXXXXXXXXX にとり下好まな  
場所になった。  
若い活気のあふスタッフの方々に下好まされた。

小西さん、丹田さん、中澤さんを始め、サポートに頑張った  
たくさんの方々に心から感謝しています。

どうも、このシーズンにやってきましたおかしな下じい。  
SVCのような居場所や、継続して続いて  
いくように願っています。

サマーバケーションクラブ最終日の連絡帳に書かれていた文章です。

## B君の連絡帳より

久しぶりの西陣会 …… でも、最後の西陣会になるのでしょうか …… ?  
夏休み、冬休み、本当に助けて頂きました。 私たちも、どれ程助けられたか？  
それは、お世話になった親たち、子供たちは、実感しています。 これからは、  
西陣会のような場所が、いつでも増え、陣営史や陣営史の親たちが  
有義的な、土曜日、長期休みがキャンセルと思っていたのですか ……  
本当に残念ではありません …… 山  
私たちが親が、財政的にもっと協力できれば …… とも反省しています。  
こうしたら、陣営のある子供たちも、住みやすい社会になるのでしょうか …… ?  
これは、今後の社会の課題でもありますね。

(次頁につづく)

「オ、ま、と、一、生、この京都の町で生きています。(弟の「も」) これならえ、  
西陣会のような 降参見の親や 降参見の心を、理解(しようと、か)んぼってくれる  
団体が、いつでも増えますように……。これが私たちの願いです」

本当に、助けて頂いてありがとうございました。心より感謝致します

「お見かけたら、「くん？」と声をかけてやって下さいね。  
あ、ママにも？」

サタデーフイバークラブ最終日の連絡帳に書かれていた文章です。

(注記)

この1年間、子ども達の居場所としてクラブ事業を開催してきましたが、この事業が助成を受けて開催できてきたという諸事情もあり、助成期間が終わった後に同じように開催していくことが資金的にも困難であり、職員体制も取れない状況であるというご説明をさせていただいた後に書かれたという背景があります。

## 中高生(同世代の仲間)からの視点

「SVCやSFCに参加して。」

岩井 千恵(高校2年生)

私が一番印象に残っていることは、中高生で最初から企画をした夏と冬のお楽しみ会でした。ただ参加するのではなくて、どんなことをしたら一緒に楽しめるのかな、と考えました。

夏のお楽しみ会は、バーベキューをした後にゲームをして遊びました、たくさんの人と食事をするのは、いいことだと思いました。いっぱいおしゃべりもできるし、和みました。

企画を考へるときに、あんまり意見も出なくて少し不安になったこともありましたが、でも、だんだんみんなが色々な事を言ってくれたり、言いたい事

を言ったりして、そんな不安は消えました。「あれをするには難しい人もいるんじゃない？」とか、やる人のことを考えながら意見したり、深いことも出てきました。けれど、そうすると色んなことに制限されてしまいがちなことばっかりになりました。「そんなん、やってみな分からへんやん！！」と誰かが言いました。最初からできないと決め付けるのではなくて、どうしたらできるかを考えるようにしました。

そしてお楽しみ会の当日、ゲームをするのに使うものを準備してあとは本番を待つのみになりました。当日は、最初からドキドでした。成功するのかなあと不安でしたが、みんなが集まってくるとその不安はなくなり、楽しみました。成功とか失敗を考えるんじゃないくて、お楽しみ会なんやから、みんなと一緒に楽しんだもん勝ちやなどあらためて実感しました。

夏のお楽しみ会は終わり、次は冬のお楽しみ会。冬はクレープを作って食べ、転がしドッジをしました。いろんな大きさのボールを転がして楽しみました。みんなの笑い声や表情を見ていると、時間があっというまに過ぎました。

夏と冬のお楽しみ会が終わってみると、楽しかったなあと思いました。やっぱり企画から関わって、自分たちがやってみたいなと思ったことができずごくうれしくなりました。

今回、この2回のお楽しみ会は私にとってすごくいい経験になりました。考えても何も浮かばないときには、手助けやアドバイスをくれる人もいてすごく感謝です。これからも、色んなことに挑戦してみたいなと思いました。

## 「ボランティア」

今井 樹(高校2年生)

僕は何回か、SFCやSVCの活動に参加しました。そのうち2回は、児童館全部を使って、焼肉をしたり、玉入れなどの遊びをする中高生企画のイベントでした。イベントのためのミーティングを僕たち中高生が中心となって進めていきました。ミーティングを進めていて、「手や足を使いにくい子は

いるのかな？」などの疑問や不安もうまれてきました。でも、「大事なのは雰囲気。まわりが楽しんでいけば、その楽しさが伝わっていく」という言葉を思い出し、一緒に楽しめるような遊びを考えていきました。

そのイベントの前に1回、SVCにボランティアに行きました。ボランティアに行く直前まで「僕のことを受け入れてくれるのかな？」という不安がたくさんありました。でもSVCのみんなのところに着いたとたん不安がなくなりました。僕が来ると、みんな喜んでくれました。そのことが僕にとって、これ以上ないくらい、うれしいことでした。この日の経験が僕にとって、今まで以上にイベントへのやる気を起こさせてくれました。

それから僕たちはイベントのミーティングを何回も行い、イベントの当日を迎えました。SVCの仲間たちや、その兄弟たちも参加してくれてとてもうれしかったし、みんなが喜んでくれるように頑張ろうと思いました。一緒にバーベキューの野菜や肉を準備したり、遊んでいくうちに、ボランティアという感覚から友達と遊ぶ感覚になりました。みんなといる時間が僕にとって短く感じるようになり、家に帰るととても時間が長く感じられました。

こういう経験をするうちに、僕はとても成長できたと思います。ちいさな子どもや障害をもっている同世代の仲間たちとは、日常生活で接することは今までにはほとんどありませんでした。でも、あまりしたことのなかったことを戸惑いつつ企画や実行することで、新しいことに挑戦する力がついたと思います。それよりも、人のためにすることがとても大事だということが、今まで以上にわかった気がします。それに、みんなが喜んでいるのを見ると、すごくうれしくなりました。

何回かしかボランティアには行ってないけれど、どれもが印象的で、僕にとって大きな経験となりました。また機会があればしたいと思います。

## ボランティア(実習生)からの視点

### 「サタデーフーパークラブ(SFC)に参加して」

齊藤 彩香 (大学2回生/ボランティア)

初めて SFC の活動に参加させていただいた日の朝、新しい場所で活動するということから生じる緊張感と共に、子どもたちとの関わりについてなど、様々な不安につつまれていました。しかしいざ活動に参加してみると SFC 自体がとてもアットホームな雰囲気であったこと、そして子どもたちの笑顔から、一日が終わる頃にはその不安はいつの間にか消え、その時その時を子どもたちと共にとっても楽しんで過ごすことが出来ていたということに非常に驚いたのを覚えています。

私自身のこの活動の目標として、ボランティアという立場から、子どもたちと同じ目線に立ち、共に楽しみながら活動するということを掲げ、この目標を達成するために、活動の中では特に自分にしか出来ない子どもたちとの関わりというものについて考えてきました。3ヶ月という短い期間であったということもあり、SFC へ来た子どもたち全員と関わることが出来なかったり、また一人ひとりとあまり深く関ることも出来ず、関係性を築き上げることの難しさを痛感させられました。時間のみが解決する問題ではないですが、時間というものの壁は大きかったように感じます。3ヶ月の間、私が活動に参加したことは子どもたちにどのように影響しているかは、分かりませんが、今後子どもたちが成長していく中で、SFC でのひと時が思い出として残ったり、何らかの形でプラスの形となってくればという思いと共に、子どもたちとの関わりについて模索してきました。しかしやはり自分自身の力量不足を感じることは非常に多かったです。そういった意味からも私が SFC に参加していて良いのだろうかと思うこともありましたが、子どもたちの笑顔を見る度、私自身自分の居場所というものをそこに感じる事が出来たように思います。正直、このように紙面に表すことの出来るような活動をしてきたかといえば曖昧な答えを返すことしか出来ません。しかし、この3ヶ月の間に様々な貴重な経験をさせていただき、多くのことを感じ、考え、学ぶ

ことが出来ました。今回の活動で最も強く感じたこととして、インクルーシブな場所作りというものは短期的な関わりではやはり難しいものであり、長期的な関わりを必要としてくるだろうということを改めて感じたことが挙げられます。しかし、子どもたちがしょうがいの有無に関わらず、一人ひとりの子どもとして、何らかの共有するものを持つようになるためには、SFCのような活動が今後もっと地域に根ざした活動となることによって長期的な関わりを持つことが必要となり、それに基づきインクルーシブな場所作りというものが可能になるのではないかと考えます。そういったことから、SFCの活動は今後、しょうがいを持つ子どもの余暇保障を考える際にとても重要な役割を示すのではないのでしょうか。

最後になりましたが、3ヶ月という短い期間でしたが、SFCに参加させていただき、同じ時間・空間を共有させていただくことが出来、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。SFCに携わってこられた皆様、本当にありがとうございました。

## 「実習を終えて」

中村 拓(同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士課程(前期課程))

私は、2006年4月から大学院進学のため、生まれ育った東北地方をはじめで出ることになり、大学院のある京都市に住むことになりました。

西陣児童館で行われた『高学年障害児の家族支援とインクルージョン推進事業』にかかわることになったのは、大学院の「フィールド・ワークⅠ」という講義のなかで、その講義の一環として、現場実習をすることになったためです。「フィールド・ワークⅠ」を受講した理由は、京都市の現場をまったく知らなかったため、京都市での障害児を支援する現場を知りたかったというのと、その現場経験を自分自身の研究に反映したかったという理由からです。4月から実習先をさがしましたが、そのなかで多くの人に出会い、多くの人からお話を伺うなかで、7月からご縁があつて、西陣児童館で行っている『高学年障害児の家族支援とインクルージョン推進事業』を実習先にさせ

ていただくことになりました。西陣児童館で実習を行うまで、3か月という時間を費やしましたが、今思うと、時間をかけて探して良かったなと思っています。

私は、子どもたちは学校の時間以外に、どのような生活を行っているのかということに関心を持っています。特に、障害児たちは、放課後や長期休暇中の余暇時間をどのように過ごしていて、そこにどのような社会福祉的支援が必要になるのかということに興味を持っています。そのなかでも、多くの制度から漏れている、小学校高学年から高校生までの知的障害児・軽度発達障害児への支援についての関心を高く持っています。障害児の状況にアプローチした多くの先行研究からは、障害児たちは放課後を過ごす場所が少なく、学校と家庭を中心とした生活を送っていることが明らかになっています。そこで、同志社大学大学院では、地域福祉理論・方法論を児童福祉分野に応用することで、障害児の地域生活を充実させることができないかという研究を行っています。そのような意味でも、西陣児童館で行われたこの事業は、私の研究テーマにも適合するものでありました。

私が子どもたちとかかわったのは、9か月という短い時間ではありましたが、そのなかでも、多くの子どもたちの成長を、間近で見ることができたように思います。多くの子どもたちとのかかわりを持ち、子どもたちとの時間を共有することで、私自身も成長することができたように感じています。ある男の子と過ごした濃密な時間もありましたが、その保護者の方は、連絡帳でのやりとりのなかで、「今日あった出来事をつたない言葉で一生懸命話してくれる」ということを書いてくださいました。子どもが今日あったことを話してくれるということは、あたり前のことなのかもしれませんが、私は、その子との濃密な時間が、その子の確かな思い出になっていることを非常に嬉しく感じています。

障害児の地域生活を支援する制度的なものとしては、放課後児童クラブ事業と障害児タイムケア事業のふたつを挙げることができます。しかし、これらの制度的な支援には問題も多く、西陣児童館のような、制度的な支援を補完するような支援がとても重要になってきます。西陣児童館には、今後とも、

この事業で得た知識や経験を生かして、障害児たちの地域生活を支援していただきたいと思っています。

最後になりましたが、ワーカーとしては半人前の私を支えてくださった、西陣児童館の職員の方々、利用者子どもたち・保護者の皆様、ボランティアの皆様に、この場をお借りして、御礼申し上げます。今後は、研究活動を通して、障害児たちの地域生活を充実させるようなバックアップをしていけたらと考えています。

本当にありがとうございました。

## 専門職からの視点

### 「障害のある児童を支える事業の必要性と有効性」

土屋 健弘(京都市障害者地域生活支援センター連絡協議会)

まず京都市の障害のある児童を取り巻く実状であるが、障害児通園施設ならびに児童デイサービスが「療育」という観点からサービス提供を行っている。就学期を迎えると福祉サービスから学校へと主たる活動の場が変遷し「教育」という観点からの支援が行われる。そして高校卒業時には、「介護」あるいは「就労」という観点から福祉サービスへと戻ってくる。障害児を支える課題として、この繋ぎ目をうまくフォローし、一人ひとりの支援スキルが引き継がれ蓄積されていかねばならないはずであるが、現在は多くの課題を積み残している。

一方、日々の課題としては、日中過ごす場が学校であるとするならば、夕方以降の過ごす場所は自宅となる。限られた児童は、学童クラブに在籍し、「健全育成・地域交流」という観点でのサービスを利用している。しかしながら学童クラブ事業の主たる支援対象は、直接的には障害児支援ではなく、親への就労支援であり「限られた児童」という状況を作り出しており、5年生以降の利用は難しい。この課題への現時点での障害児福祉サービスは、本



来的には日中一時支援とされており、障害児の入所施設等がその事業を行っている。しかしながら施設の特徴もあるが、限られた空間の中で、プログラムのない過ごし方が一般的とされており、そのような場で過ごすことを苦手とする児童が存在していることも事実である。結果的に、障害児福祉サービスにしても「限られた児童」を生み出している現実がある。

今回、社会福祉法人西陣会での取り組みの1つは、長期休暇課題への1つのモデル事業であった。長期休暇中に一日に10数人という学齢期の利用者を受け入れ、1日を特定の場所でプログラムを準備して過ごすことのできる預かり型事業は皆無に近く、特に共働き世帯の方々から、同様の時間帯への介護を求められた時、それに対応できる十分な居宅支援（ヘルパー派遣系）サービスの確保は不可能な実状にある。毎年やってくる長期休暇課題は、共働き世帯であれば、障害がない児童でも心配の種であり、一定数であっても日中の時間帯を支えるプログラムを備えた預かり型のサービスは、ずっと待ち望まれていたものと言える。

冒頭でも「障害児支援課題は、年齢という成長に応じて求められるサービスを繋ぐ課題であり、昼から夜へ、夜から昼へと繋ぐ課題である」と述べたが、繋がりきれなかった障害のある児童に1つの有効な繋ぎ目を提供するという意味で、今回のモデル事業は極めて有効性のある事業であった。今後としては、今回のモデル事業に似た障害児タイムケア事業はもとより、日中一時支援、短期入所事業、あわせて交流の場を創出する学童クラブ事業の利用機会の拡充にむけた行政施策と後押しを、相談支援事業者として強く期待したい。

## 「はじめのイーッポ!!!」

**大和 明子(元児童館館長／華頂短期大学、滋賀文化短期大学非常勤講師)**

児童館の現場を退いて一年有余の月日を経過したある日、水谷館長から新たな事業のための検討委員会委員にと要請があった。在職時代共に過ごした障害のある児童が学童クラブの統合育成を終えた5年生からの生活をどうし

ているのか、退職してからも気がかりな日々であった。必要性を強く感じながら施策のない中で実施できなかったことが退職後も大きな忘れものとして残っていた。小中学校の長期休業を思うと一入であった。

委員会で本事業の理念・計画案を示されたが、それらは確かなものであり異論をはさむ余地はなかったといっても過言ではない。そして何よりも新たな事業に取り組む英断と意気込みが館長をはじめスタッフの瞳の輝きにあらわれていた。

私が一番成果を期待したことはこの事業が5年生以上の障害のある児童の生活を中心におきながら、中高生にボランティアとして活動してもらい、その側面を大学生や社会人のボランティアが援助し、さらに全体を職員が指導するという体制である。ともすると障害のある児童が孤立しがちな事業に配慮すると同時に障害のない児童との交流や中高生の健全育成をも念頭においた取り組みであるという点である。障害のある児童とその保護者を渦の中心にしながらかつ同世代の中高生をはじめ大人・スタッフがその周囲を取りかこみ、さらに大きな渦となって躍動する様子を想像した。とは言いながら初めての試みで利用者が集まるかどうか、財政面で赤字になるのではないかという一抹の不安はスタッフ・委員全員の中にあつたことは否めない。確かに利用希望者の出足は遅かつた。

事業を終えた後のクラブ事業検討委員会では、事業報告とともに事業開始後利用者も増えたという報告と歓びの声が溢れた保護者の感想文が配布された。その歓びの声がすべてを物語り、一委員の批評など不要とし、この事業の成果を示していた。そして、猛暑の30日有余をこの事業に取り組んだスタッフの笑顔が決して楽ではなかつたはずの事業を成し遂げた達成感を伝えた。そして、私が心配していた児童二名のイニシャルがそこにあつたことも…。

しかしながらこの事業がすべての児童館で実現可能かと問われると即答はできないかもしれない。何故なら、西陣児童館の空間的規模や地域に根ざした活動の歴史、そして統合育成の礎を築いた実績によるものが大きいと思うからである。さらに、西陣児童館には施策の谷間で援助を求める人々のニー

ズを把握し、それに対応するために運営母体や施設職員が一丸となる素地が存在するということである。

いま、中学生以上の障害のある児童の放課後対策が計画されている。西陣児童館の行政に先駆けた実践とその記録は貴重な資料となり、多くの児童館職員への啓蒙と指導書になると確信している。「はじめのイーッポ（一歩）！！！」子どもたちの声が聞こえる。

# ⑥資料集紹介

この1年間実施してきた事業のなかで、さまざまな資料や報告書、フォーム等を作成してきました。ここでは、それらを簡単に紹介していますので、日々の活動や新しく活動をされる際のご参考になれば幸いです。

資料の詳細につきましては、お渡しさせていただくこともできますので、その際にはお問い合わせください。

## ■アンケート調査の報告書

### ○実態調査報告書

北総合養護学校小学部の保護者を対象に子ども達の放課後や長期休暇中の過ごし方やニーズなどを調査したものです。

### ○事業効果の調査報告書

サマーバケーションクラブご利用の保護者を対象に利用後のご意見感想等を調査したものです。

## ■クラブ事業実施にあたって用意したフォーム

### ○フェイスシート

本人の障害名・障害特性から発作時の様子や服薬の情報、本人とのコミュニケーションの取り方や移動上の注意点、食事や排泄、衣服の着脱時の様子、本人の好き・嫌いな事など・・・、受入にあたって必要な情報を保護者に記入していただくシートです。

### ○業務日誌

1日の活動の流れや、当日の利用児童の名前・人数、報告・連絡事項や保護者からの相談もしくはクレーム、イベントの内容、ヒヤリ・ハットした場面は無かったか等を記入しました。当日の活動を事前に把握する事と、活動が終了した後その日を振り返る為に使用しました。

### ○個別シート

子ども一人ひとりの、その日にあった特記事項とそれについての所見を

記入し、各職員が情報を共通に把握出来るよう使用しました。誰がシートの情報を読んでいるのかということも確認できるようにしました。

### ○業務シート

活動時の準備物や各時間帯にやるべき業務内容などを明記しておき、各職員が共通理解してスムーズに業務を行えるようクラブ事業開始当初使用しました。

### ○服装チェック表

当日の子ども達の服装や持ち物などを記入しました。子ども的人数も多いため、荷物の間違いや忘れ物への対応、万が一外出時などに見失ってしまった場合にも、迅速に対応出来る為に使用しました。

### ○トイレチェック表

子ども達のトイレの時間・量などを記入して、各職員がチェック用紙を見ながらトイレの失敗が無いよう対応出来るように使用しました。

### ○発作記録

発作があった場合の状態や対応を記入しておき、特定の職員だけでなく全ての職員が情報を共有して同じ対応が出来るように使用しました。

### ○忘れ物対応確認シート

忘れ物があった場合に、保護者への連絡状況や対応方法など記入し、確実に返却が出来るように使用しました。

### ■その他

その他、各章で紹介してきた事業の内容や案内、報告としてまとめたものがあります。このようなものはないか？ということがありましたら、お問い合わせいただければ対応させていただきます。

# ⑦その他

新聞掲載記事

## 障害のある子へ

# 休暇中の居場所

西陣児童館

小5-高3

受け入れ

障害のある子どもたちが安心して過ごせる場所をつくらうと、京都市上京区元誓願寺通千本東入ルの西陣児童館は本年度から、長期休暇や土曜に、小学五年から高校三年までを受け入れる体制をつくる。家族や介助者の付き添いがなくても利用できるよう、期間中は臨時スタッフを雇ったり、各家庭から児童館までの送迎を行う。

小学一年から四年までの障害児は、児童館など

## 24日、説明会

が実施する学童クラブに登録でき、市が実施する介助者派遣事業も利用できる。しかし、五年以上になると、クラブに入れない。同世代の友だちがでなくなり、送迎や付き添いがなくなると、児童館を利用しづらく、状況になっている。

長期休暇中の子ども居場所を設けてほしいという保護者の要望を受け、同児童館は本年度、独立行政法人福祉医療機構の助成金をもとに居場所づくりを始める。夏休みと冬休み、九月から来年三月までの土曜日に児童館に来てもらい、ゲームや散歩などで半日から一日を過ごしてもらおう。登録制で、定員や利用料は二十四日午後一時から同児童館で開く「障害のある児童を抱える親の勉強会」で説明する。障害者自立支援法の勉強会を兼ねており、参加対象者は、左京、北、上京、中京の四区に住む障害児の家族で先着五十人。申し込みは同児童館 ☎075(451)8972。

京都新聞2006年6月21日(水曜日)朝刊掲載

# サマーバケーションクラブあす終了

## 障害がある子どもたちへ 居場所なくさない

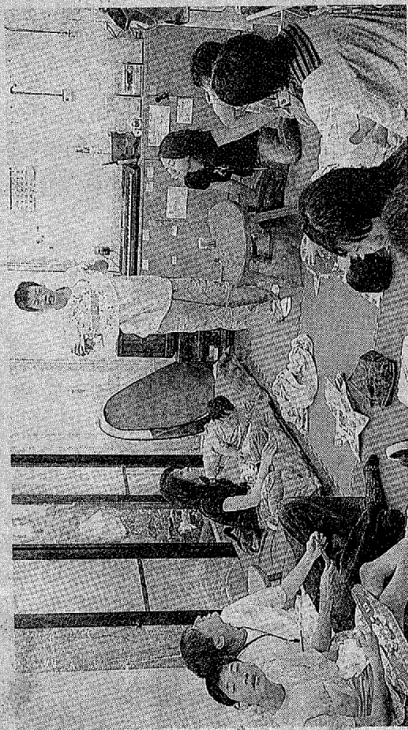
障害がある子どもたちの長期休暇中の居場所にと、京都市上京区の西陣児童館が今年初めて開催した「サマーバケーションクラブ」が、二十六日に終了する。参加した子どもらは、同世代の友だちとゲーム遊びをしたり、児童館の中学生が自主企画したバーベキューに参加するなど、夏休みの思い出を増やした。

同クラブは、障害がある子どもたちが家族や介護者の付き添いなしで友だち作りや地

西陣児童館

プール、バーベキュー…

### 24人が登録



域住民と交流する場を旨として企画された。京都市左京区北、上京、中京の四区に住む小学五年から高校生までの子どもたち二十四人が登録。日曜を除き約三十日間のところ、希望日に利用した。

クラブも終盤となった二十四日は、参加した八人が、夏休みの思い出を発表した。子どもたちの顔写真や折り紙をはったボール紙を手に、「おばあちゃんの家にお泊りした」「エキスボランドに行った」などと夏休みで一番楽しかったことを報告し合った。

九月十六日からは、毎週土曜の「サタデーナイトクラブ」に移行し、冬休みには夏休み同様のクラブが予定されている。同児童館を運営する西陣会は今後、京都市の施策としてクラブを実施するよう求めていく。同会の浅田将之事務局長は「近き家族向けのアンケートを取り、保護者のニーズをまとめて市に要望したい」と話している。

同児童館（ひこう145）8972では現在、サタデーナイトクラブの登録申し込みを受け付けている。

夏休みの思い出を報告する参加者たち（京都市上京区西陣児童館）  
本東久弘

# サタデーファイバークラブに来月移行

## ご協力になった皆さま

この場を借りて、改めて御礼申し上げます。(順不同、敬称略)

### 【個人】

■「クラブ事業検討委員会」でご協力いただきました。

上羽 尚美 (家庭療育援助グループ ピーポ)  
小野 恵以子 (社会福祉法人京都市上京区社会福祉協議会)  
土屋 健弘 (京都市地域生活支援センター連絡協議会)  
國重 晴彦 (社団法人 京都市児童館学童連盟)  
清水 邦彦 (社団法人 京都市児童館学童連盟)  
大和 明子 (華頂短期大学非常勤講師/元児童館館長)  
善積 あさみ (京都市立北総合養護学校 支援部)

■「西陣児童館ボランティア養成講座」「中高生ボランティア養成講座」でご協力いただきました。

宮崎 一弥 (社会福祉法人西陣会 デイセンターふらっと)  
三浦 正人 (社会福祉法人京都保育センター たかつかさ児童館)

■「障害のある児童を抱える親の勉強会」「子育て支援講座」でご協力いただきました。

土屋 健弘 (社会福祉法人西陣会 京都市北部障害者地域生活支援センター「きらリンク」)  
龍尾 和幸 (社会福祉法人平安養育院 セルフサポートセンター東樹)  
山崎 恭代 (西陣児童館学童クラブ 保護者会)  
柴崎 雅美 (西陣児童館学童クラブ 保護者会)

■「中高生の企画立案による行事の実施」でご協力いただきました。

今井 樹 (高校2年生)	糸井 翼 (中学3年生)	東郷 寛子 (中学1年生)
岩井 千恵 (高校2年生)	森本 朝子 (中学2年生)	野原 菜友美 (中学1年生)
上村 友香 (高校2年生)	山本 利由 (中学2年生)	舟橋 邦晃 (中学1年生)
中川 真妃 (高校2年生)	飯田 真実 (中学1年生)	丸山 祐介 (中学1年生)
山本 和由 (高校2年生)	市瀬 拓也 (中学1年生)	

■「クラブ事業(SVC・SFC・WVC)」でご協力いただきました。

池田 彩友美 (ボランティア)	吉岡 彩美 (ボランティア)	辻 満 (ボランティア)
斉藤 彩香 (ボランティア)	岸本 千沙子 (ボランティア)	藤居 篤司 (ボランティア)
西井 珠美 (ボランティア)	中村 拓 (同志社大学大学院 実習生)	
中西 憲吾 (ボランティア)		
田中 豪 (立命館大学ボランティアコーディネーター養成講座 実習生)		
菊池 葉 (立命館大学ボランティアコーディネーター養成講座 実習生)		
佐藤 愛 (立命館大学ボランティアコーディネーター養成講座 実習生)		
竹仲 祥一 (立命館大学ボランティアコーディネーター養成講座 実習生)		



杉村 美佳	(研修)	高橋 恒明	(研修)	中條 裕美	(研修)
上田 直子	(アルバイト)	中嶋 美帆	(アルバイト)	野里 香世子	(アルバイト)
濱田 和江	(アルバイト)	宇井 真由美	(アルバイト)	森 勇輝	(アルバイト)
白波瀬 佐紀	(アルバイト)				

■ご寄付、ご寄贈いただきました。

大和 明子	上羽 尚美	隅水 容子
三浦 正人	中澤 幸七	濱田 和江
吉岡 睦美	長畑 厚子	中嶋 美帆

【団体】

■アンケート実施で後援、ご協力いただきました。

社会福祉法人京都市上京区社会福祉協議会	社会福祉法人京都市中京区社会福祉協議会
社会福祉法人京都市北区社会福祉協議会	社会福祉法人京都市左京区社会福祉協議会
京都市立北総合養護学校	

■スタッフ研修でご協力いただきました。

社会福祉法人イエス団 重症心身障がい者通所事業B型「シサム」

■施設見学、情報提供でご協力いただきました。

大津市障害児タイムケア事業 ぼあん  
 社会福祉法人みずなぎ学園 中高生タイムケア事業  
 NPO法人四ツ葉の会  
 NPO法人のびっこ寮育センター  
 特定非営利活動法人レスバイトハウス・ハンズ  
 社会福祉法人宇治東福祉会 障害児タイムケア事業  
 京都市立北総合養護学校

■情報提供等でご協力いただきました。

社会福祉法人京都身体障害者福祉センター 京都市中部障害者地域生活支援センター「らくなん」  
 社会福祉法人西陣会 京都市北部障害者地域生活支援センター「きらリンク」  
 社会福祉法人西陣会 京都市中部障害者地域生活支援センター「にしじん」  
 社会福祉法人京都市上京区社会福祉協議会  
 社会福祉法人京都市北区社会福祉協議会  
 社会福祉法人京都市中京区社会福祉協議会  
 社会福祉法人京都市左京区社会福祉協議会

■「クラブ事業(SVC・SFC・WVC)」でご協力いただきました。

家庭療育援助グループ ピーポ

発行

2007年3月

**社会福祉法人西陣会  
西陣児童館**

〒602-8464 京都市上京区元誓願寺通千本東入

電話：075-451-8972 F A X：075-451-5700

メール：jidoukan@nishijin.org

ウェブ：http://nishijin.org

**事業担当者**

水谷洋一 浅田将之 小西秀和 寺田文 中澤智子

宮崎一弥 中山あい 浜上美加子 吉岡睦美